

## クノー作品におけるヴィーコの歴史観の 反映について（承前）

une autre réflexion sur “*Les fleurs bleues*” de Raymond Queneau (suite)

古谷佐世子  
(仏語研究室)

(2022年12月21日受理)

### はじめに

前回は、レーモン・クノー（1903～1976）後期の一作品で、1964年に執筆され、1965年に発表された小説『青い花』（原題“*Les fleurs bleues*”）における作品構造に着目し、小説の進行を人類の歴史の進行に重ね合わせるという作家の意図を確認する為、特にクノー自身による『典型的歴史』の記述について、具体的に検証を重ねた。今回は、『典型的歴史』の根底にあるヴィーコ思想について、直接、検証を進めてみよう。

清水、米山訳『新しい学』の訳註には、以下のように解説されている。

《ヴィーコの歴史観によれば、歴史行程は野蛮状態から、文明状態へと、神々・英雄・人間の三つの時代階梯を経て進み、この過程が完了すると、再び初期野蛮時代に戻って同じ行程を新たに繰り返すものとされる。したがって太古野蛮時代は「初期野蛮時代」《*tempi barbari primi*》であり、これに対して、ヨーロッパ中世は「再帰せる野蛮時代」《*tempi barbari ricorsi*》と呼ばれる》<sup>i</sup>

本文では、この歴史行程に関して、以下のように記述される：

《[243] 人類には、まずポリュペモスのような粗暴な巨人が出現し、それからアキレスのような誇り高い勇者が現れ、ついでアリスティデイスやスキピオ・アフリカヌスのような勇気と正義とを具えた者が出た。時代が下るにつれて、偉大な有徳の姿と大悪とを兼ね具えた者が、大衆の間で熱狂的栄光を得るようになる。アレクサンドロスやカエサルのごとき人物である。さらに下ると、ティベリウスのような痛ましい反省の想い出が生まれるが、最後にはカリグラやネロやドミティアヌスのような放縦な恥知らずの気違いどもが輩出するようになる。》<sup>ii</sup>

その行程について、ヴィーコは6段階の局面を想定する：

《[244] ... 最初の人間たちは、家族状態のもとで人間を人間に従わせて、やがて来たるべき都市国家のもとで人間が法に従うように準備する必要があった。次に、自分と同等な人間に服従することが生まれつきできない人間たちが、家族制を土台として、貴族政体の共和国を設立した。第三の者たちは、民衆の自由の為に道を開いた。第四の者は、そこに君主制を導入した。第五の者は、君主政体を確固たるものとし、第六の者が、これを崩壊させた。》<sup>iii</sup>

《[245] この公理は、... 永遠の理念史の原理の一部をなすものである。この永遠の理念史にもとづいて、あらゆる民族は、勃興、発展、停滞、衰退、終焉を、時の流れの中に刻んでゆくのである。》<sup>iv</sup>

その著作を始めるに際し、ヴィーコがまず対象としたのは、古代諸民族であった。冒頭には、古代諸民族を比較対照させた年表が掲げられている。ここでも我々は、『青い花』の冒頭が、ヴィーコの著作と全く同様に、古代諸民族の描写によって開始される事実を見逃すことはできない。<sup>v</sup>

ヴィーコの本文では：

《[43] この年表は、古代諸民族の世界を順序づけて表したものである。その世界とは、世界大洪水に始まり、ヘブライ人からカルデア人、スキュタイ人、フェニキア人、エジプト人、ローマ人を経て、第二カルタゴ戦争に至るまでをいう。》<sup>vi</sup>

《[51] そもそもキリスト教信仰は以下の事実から出発している。即ち、世界最初の民族はヘブライ人であること、その王はアダムであり、真実の神によって、世界創造とともに造られたものであること。そこでまず最初になすべきものは神話学でなければならない。つまり神話伝説の解釈でなければならない。(なぜかという... 異教の歴史はすべて神話的な始まりを持っているからであり) 神話伝説は異教民族の最初の歴史だったからである。... それ以外の源は考えられない。... 世界史はここから始めねばならない。... 》<sup>vii</sup>

《[52] ... このためにはエジプト人の古さが大いに役立つであろう。... エジプト人は次のような、ピラミッドにも劣らずすばらしい二つの偉大な遺言を伝えているからである。これは二つの偉大な言語文献学的真理ともいべきものである。一つはヘロドトスが報告していることであるが、彼らが世界史の全行程を三つの時代、第一の神々の時代、第二の英雄の時代、第三の人間の時代、に区分したことである。もう一つは、これらの時代(区分)に、数の上でも順序の上でも対応しつつ、三種の言語が用いられてきた、と述べていることである。即ち、第一は、神聖文字によって(伝えられている)象形語、第二は、英雄文字による象徴語、第三は民衆に共用された書簡語で、これはシェファールが『イタリア哲学』<sup>viii</sup>の中で伝えているところ

である。》<sup>ix</sup>

《もっともこの時代区分を、マルクス・テレンティウス・ワッロ<sup>x</sup>は採用していない。... ワッロは、(文化の始原が)あらゆる古代民族に共通して見出されるといふ本書の原理とは反対に、神および人間に関するあらゆるローマの制度、習慣は、ローマ土着のものであるという、ローマ起源説をとったからである。... 彼は... すべてをラテン起源から説明しようと腐心して... 全世界史を、暗黒時代、伝説時代、歴史時代に三分した... それぞれ、エジプト人のいわゆる、神々の時代、英雄の時代、人間の時代に相当するものである。》<sup>xi</sup>

『新しい学』第5巻《諸民族が再帰したときに生ずる文明の反復》序文において、ヴィーゴはさらに〈再帰せる野蛮時代〉の概念を論じ、そこで自分が、前出ワッロよりもさらに先に進むであろうことを明言する：

《[1046] これまでに我々は、本書全体にわたる無数の箇所が無数の資料を扱いながら、最初の野蛮時代と再帰せる野蛮時代(中世)との驚くべき一致を観察してきた。だから我々は、諸民族が再帰するとき、文明現象が反復されるということ、それらの箇所から容易に理解することができる。... この点をさらに裏付けるために、私は当第5巻でこの問題のために特に紙数をさきたいと思う。なぜなら、そうすることによって、第二の野蛮時代(この時代は、初期の古代史に関するもっとも豊かな学識の持ち主であるマルクス・テレンティウス・ワッロが、その時代区分において「暗黒時代」ということばで呼んだ最初の野蛮時代よりも、いっそう深い暗黒の底に横たわっている)にもっと強力な光をあてて明らかにできるからである。》<sup>xii</sup>

『青い花』の作中人物、聖ルイがカペー朝の王であった事実を想起しよう：

《[1048] 神は、その永遠の知恵によって、まぎれもない神の時代を再びもたらした。その時代には、カトリック教を信奉する王たちが、自ら保護者となっているキリストの教えを守るために聖職者の法衣をまとい、王としての自分の人格を聖別し... 教会の高い地位を兼任することになった。... サンフォリアン・シャンピエが『フランス王統記』でユーク・カペーについて記しているところによると、彼は「パリ伯爵兼大修道院長」と名乗っていた... またパラダンの『ブルゴーニュ年代記』には、フランスの君主たちが、普通「公爵兼大修道院長」もしくは「伯爵兼大修道院長」の称号を与えられていることを示す古い文献のことが記されている。同様に、初期のキリスト教国の王たちは、「騎士修道会」を設立し、それを利用して自分の王国内にカトリック教を確立し、アリウス教徒(聖ヒエロニムスは、キリスト教世界が彼らによってほとんど全部汚されたと述べた。)や回教徒、その他の多数の背教徒たち<sup>xiii</sup>に対抗した。》<sup>xiv</sup>

『青い花』における聖ルイは、まさに十字軍を率いてカルタゴの回教徒に対抗する準備中であり、憂鬱そうに嘆声を漏らす。<sup>xv</sup>

《〔1049〕 こうして、英雄的な諸民族によって、〈純粹にして神聖なる戦さ〉と呼ばれていた戦争が、実際に復活した。だから今日でもなお、キリスト教を奉ずる全ての王国は、王冠の上に載せている丸い玉の上に、十字架をいただいている。その十字架は、かつて彼らが十字軍と呼ばれた戦争に従事した際、軍旗の上に奉じていたものである。》<sup>xvi</sup>

以上の記述から、我々はクノーの描く 1264 年の時代が、ヴィーコの「神々の時代」の範疇に属していた事実を理解する。聖ルイの政治は神の政治であり、〈十字軍〉は回教徒に対抗する〈純粹にして神聖なる戦さ〉の再現であった。

聖王ルイ：《le roi assis sous son chêne》<sup>xvii</sup> は、それ自体がすでに〈神〉の範疇に属するが、さらに、聖王ルイに与えられる描写は、他の作中人物の場合に比して、著しく特異な位置を占める：

《 - Que vois-je! s'écria le roi assis sous son chêne, n'est-ce point là mon bien aimé Auge qui s'avance?  
- Lui-même, sire, répondit le hobereau en s'inclinant bien bas.  
Mes respects, ajouta-t-il.  
- Je suis heureux de te voir en florissante santé, dit le roi.》<sup>xviii</sup>

《Le roi sourit de sa bénévolante indulgence et la flote qui l'entourait ne l'en admire que plus.》<sup>xix</sup>

《Dégainant son braquemart, il<sup>xx</sup> fit de larges moulinets qui mirent en fuite manants, artisans et bourgeois, ... ce qui en occit quelques dizaines pour le repos de l'âme desquels le saint roi pria plus tard efficacement.》<sup>xxi</sup>

《Lui, Louis, n'oublia pas les services que je lui rendis ... Lui, Louis, il veut y retourner ... Lui, Louis, ce n'est pas comme moi, c'est un saint homme, on finira par voir son nom sur le calendrier ...》<sup>xxii</sup>

斯くして、聖ルイは、ヴィーコにおける《最初の王》<sup>xxiii</sup> の肖像に一致する：

《〔250〕 あらゆる民族は何らかの神性を崇拝することから始まったもので ... 家父長たちは、神占に通じた智者であり、神占の儀式を行う、もしくはその意味をよくわきまえた司祭でもあり、また家族一同に神聖な法を布く王でもなければならなかった。》<sup>xxiv</sup>

- 
- i 『新しい学』 清水、米山訳、中央公論社 1975 訳註 66(1) p.555
- ii ibid. pp.136-137
- iii ibid. p.137
- iv ibid. p.137
- v F.B. pp.9-12: par exemple: " ... Sur les bords du ru voisin, campaient deux Huns; non loin d'eux un Gaulois, Eduen peut-être, trempait audacieusement ses pieds dans l'eau courante et fraîche. Sur l'horizon se dessinaient les silhouettes molles de Romains fatigués, de Sarrasins de Corinthe, de Francs anciens, d'Alains seuls. Quelques Normands buvaient du calva. ... " ( p. 9 )
- vi 『新しい学』 p.77
- vii ibid. p.83
- viii Scheffer, J.: De natura et constitutione philosophiae italicae, 1644. (1621-70)
- ix 『新しい学』 pp.83-84
- x Marcus Terentius Varro: Antiquitatem rerum humanarum et divinarum libri, 41 vols. (B.C. 116-27)
- xi 『新しい学』 pp.83-84
- xii ibid. p.518
- xiii cf. F.B. p.37:(Auge):"Ne serais-tu pas albigeois, par hasard?"
- xiv 『新しい学』 pp.518-519
- xv cf. F>B. p.21:(Saint-Louis):"Ah! je vois que j'aurai bien du mal à mener cette huitième croisade."
- xvi 『新しい学』 p.519
- xvii F.B. p.20
- xviii ibid. p.20
- xix ibid. p.20
- xx Auge
- xxi ibid. p.20
- xxii ibid. p.20
- xxiii 『新しい学』 p.138
- xxiv ibid. pp.137-138

